



Title	新出土資料関係文献提要（十一）
Author(s)	大阪大学中国哲学研究室
Citation	中国研究集刊. 2012, 54, p. 88-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新出土資料関係文献提要（十一）

大阪大学中国哲学研究室

本提要は、『中国研究集刊』麗号（総四十八号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十）」の続編である。今回は、二〇〇九年から二〇一一年までに発行されたものを中心とした。以下、「原釈文」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の三つに分類する。

原釈文

『**清華大学蔵戦国竹簡（壹）**』（清華大学出土文献研究・保護中心編・李学勤主編、中西書局、二〇一〇年十二月、二八〇頁（他、前言・凡例・本輯説明・目録など九頁）、縦組繁体字）

清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）の図版（写真版）と釈

文とを収載した書。全約二四〇〇簡を収録予定で、本書はその第一分冊にあたる。上下二冊よりなり、上冊にはカラーの原寸大図版・有字簡拡大図版が収められ、また下冊には釈文と注釈とが示されている。

清華簡には『尚書』や『逸周書』、また『竹書紀年』などの史書に類似する文献が含まれていると公表されており、多くの研究者の注目を集めている。

本書には、『尹至』『尹誥』『程寤』『保訓』『耆夜』『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』『皇門』『祭公之顧命（祭公）』『楚居』の九篇が収められている。以下、各文献の内容について簡単に紹介する。

『尹至』は全五簡、簡長約四十五センチ、三道編綫（編線）、整理者は李学勤氏。篇題はなく、冒頭の「惟尹自夏徂亳、遑至在湯」により「尹至」と名付けられた。

『尚書』の商書諸篇との関連が指摘されている。本篇には、夏の滅亡と殷の勃興について湯王と伊尹が問答し、湯王が諸侯を服従させ、徳に従い行動して、夏を破る内容が記されている。なお、『尹至』は竹簡形制や字体が『尹誥』と合致するため、同一人物により書写された可能性が指摘されている。

『尹誥』は全四簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は李学勤氏。篇題はなく、伝世文献との対応やその内容から「尹誥」と名付けられた。本篇は、孔壁古文逸書十六篇のうち的一篇に該当すると考えられている。内容は、『尹至』同様、湯王と伊尹の問答形式で記されており、伊尹が夏の滅亡の原因を、夏の君（桀）が民を蔑ろにし、民が離叛したためであるとし、それを防ぐためには、夏の財宝を民に分与する必要があると説いている。『程寤』は全九簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は劉国忠氏。篇題はなく、「程寤」とは整理者が内容に基づいて付けた仮称である。本篇は、これまで『芸文類聚』や『太平御覧』などに一部引用されていた古逸書の『逸周書』程寤篇であると考えられている。内容は、周の文王の妻太姒が、殷に代わり周の天下統治を予感させる夢を見るが、文王はまだ殷の力が強く、周の天下統治には長期的な策謀が必要であるとして、太子発

（後の武王）に訓戒を告げるものとなっている。

『保訓』は全十一簡、簡長約二十八・五センチ、兩道編綫、整理者は李守奎氏。篇題はなく、内容に基づいて「保訓」と名付けられた。本篇には、周の文王が太子発に対して遺訓を施す内容が記されている。本篇中、文王は、優れた事例として舜や上甲微（湯王の六代先）の行いを挙げ、太子発に慎み深くし、怠ることのないようにと戒めている。なお、本篇は『清華大学藏戰国竹簡（壹）』の刊行以前にすでに釈文が公開されており、本文中に見える「中」の解釈について、多くの研究が発表されている。『著夜』は全十四簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は趙平安氏。第十四簡背面に篇題「鄩（著）夜」が見える。本篇は古逸文献であるが、「蟋蟀」と名付けられた歌と『詩経』国風・唐風の「蟋蟀」との間に関連が指摘されている。内容は、武王即位八年、周が耆を征伐した後、文王の太室に行われた飲至の儀礼に関するものである。そこでは武王・周公旦がそれぞれに向け、また畢公に向けて歌を詠み、戦功を称えると同時に、周公旦が勝利に酔いしれてはいけなさと教戒的な歌を詠ずる。

『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』は全十四簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は劉国忠

氏。第十四簡の背面下部に篇題「周武王有疾周公所自以代王之志」が見える。本篇は今本『尚書』金縢篇とおおよそ合致する内容である。全体は以下の三つの場面に分けられる。①病に伏した武王のために、周公旦が自ら身代わりとなろうと先王に祈る場面。②幼い成王を助け政治を行う周公旦が、兄弟の流言のために不遇な境遇に陥る場面。③成王が周公旦の武王に対する献身的態度を知り、自らの周公旦への態度を改めたことにより、天災が止むという場面。今本『尚書』との対照により、字句や篇題、『尚書』成立に関する諸問題の解決が期待される。

『皇門』は全十三簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は李均明氏。篇題はなく、内容が『逸周書』皇門篇とおおよそ一致することから「皇門」と仮称された。本篇には、周公旦が血族や近臣に向けて、歴史を鑑とし、私心を捨てて賢人を推挙し、王の国政を助けるよう訓戒する内容が見える。

『祭公之顧命』は全二十一簡、簡長約四十五センチ、三道編綫、整理者は沈建華氏。第二十一簡の背面下部に篇題「摠（祭）公之勝（顧）命」が見える。本篇は『逸周書』祭公篇とほぼ合致する内容である。病を患った祭公謀父が穆王に対して、夏・殷の滅亡を教訓とし、周の基盤となる文王・武王の功績を守り言行を正しくせよと

訓戒する。また、執政を行う三公（畢桓・井利・毛班）に向け、王を輔佐し国を保持するよう告げている。

『楚居』は全十六簡、簡長約四十七・五センチ、三道編綫、整理者は李守奎氏。篇題はなく、内容が『世本』居篇に類似することから『楚居』と仮称された。本篇には、楚の歴代君主の所在や国都の変遷が記されており、また「楚人」や「柰」（儀式の名）、「郢」（楚の都）などの語句の由来も窺える。本篇は、楚の在地性文献として重要な情報を提供するものと考えられる。

なお、郭店楚墓竹簡や上海博物館藏戰国楚竹書とは異なり、清華簡には、『程寤』『保訓』『楚居』を除く各文献ごとに、竹簡の背面に配列番号が記されており、錯簡や脱簡を疑う余地はない。

また、各篇の积文末には、関連する伝世文献の引用や関係系図が附され、各篇を比較検討する上で簡便である。さらに、巻末には「字形表」および「竹簡信息表」が附されており、文字を確定、または書誌情報を確認する上で有用である。「字形表」には、积文において隸定された字形に基づき、およそ三二一六字（重文含む）が収録され、「竹簡信息表」には、各簡ごとに「篇序」「篇名」「整理序号」「入藏编号」「長度」「簡背原有编号」「編痕状況」「備註」が記述されている。

二〇一一年十二月には、『繫年』（周・晋・楚などの歴史的事件を記した書）の図版と釈文とを掲載する『清華大学蔵戦国竹簡（貳）』が刊行された。

（金城未来）

『岳麓書院蔵秦簡（壹）』（朱漢民・陳松長主編、上海辭書出版社、二〇一〇年十二月、二二〇頁（他）、目錄・前言・凡例など五頁、別冊拡大図版七十八頁）、縦組繁体字（附録「釈文連読本」のみ横組）

岳麓書院蔵秦簡（岳麓秦簡）の図版と釈文とを収載した書。総計二千余簡（三十数枚の木簡を含む）を収録予定で、本書はその第一分冊にあたる。原寸大カラー図版と原寸大赤外線図版の二部構成となっている。カラー図版には、各竹簡の正面（有字面）画像の横に、それぞれ釈文が附されている。一方、赤外線図版には、竹簡の表裏両面の画像が掲載され、カラー図版同様、すべての竹簡画像の横に釈文が示される上、さらに一定のまとまりごとに、注釈も合わせて附されている。

岳麓秦簡には、雲夢睡虎地秦簡と類似した秦の律令や役人のための手引き書が含まれていることから、その墓

主について、治獄にたずさわった人物であった可能性が指摘されている。

本書には、『質日』『為吏治官及黔首』『占夢書』の三篇が収められる。以下、各文献の内容について簡単に紹介する。

『質日』は計一六五簡、竹簡の背面に篇題が記される。整理者は于振波氏。竹簡の大部分は比較的保存状態が良好であるが、中には欠損しているものもある。ただ、欠損の見られる竹簡に関しても、上部に附された干支の文字が鮮明に残っているため、すべての竹簡の配列はこの干支の順序により、復原することができる。また、『質日』は竹簡の形制により、大きく以下の二種に類別できる。①簡長二十七センチ、幅約六ミリ、記述された干支と内容がすべて「秦始皇二十七年」もしくは「三十四年」のもの。②簡長約三十センチ、幅五ミリ、内容が「秦始皇三十五年」のもの。この『質日』の年号により、岳麓秦簡に含まれるその他の文献に関しても、成書年代の下限は、「秦始皇三十五（前二二二）年」附近であろうと考えられている。

『為吏治官及黔首』は計八十七簡、竹簡の背面に篇題が見える。整理者は許道勝氏。簡長は約三十センチ、三道編綫。残存する編綫が、多く文字と重なっていること

から、竹簡が書写された後に編聯された文献と考えられている。本篇の内容の大部分は、三、四段に分割して記述される。内容・記述形式ともに睡虎地秦簡の『為吏之道』とはほぼ同様の文献（秦代の役人のための教材）であると指摘されている。なお、本篇には、分段されていない竹簡が三枚含まれるが、これらは書写内容から判断して、役人教材の主旨を概述したものと考えられる。

『占夢書』は計四十八簡、整理者は陳松長氏。もともと竹簡に篇題は記されておらず、整理者により「占夢書」と仮称された。簡長は約三十センチ、三道編綫。本篇の筆写方法には、次の二通りが見られる。①分段せずに筆写されたもの。計六簡。陰陽五行学説によつて占夢理論を解釈している。②二段に分けて記述されたもの。夢象と占語とを記す。なお、岳麓秦簡『占夢書』は、現存最古の占夢に関する文献であると指摘されている。

本書の巻末附録には、各文献の釈文のみを連続して記した「釈文連読本」、荊州漢代竹簡・走馬樓漢代竹簡・岳麓秦簡などを科学的に比較して、岳麓秦簡の真偽に言及した「検測報告」、整理前の竹簡状況の写真・竹簡配列説明図を掲載した「竹簡掲取時の原始照片及簡序示意图」が見える。また、別冊として赤外線拡大図版（原寸の一・五倍）が附されている。

本書の「前言」によれば、岳麓秦簡にはこの他にも『数』書・『奏讞書』・『秦律雜抄』・『秦令雜抄』などが含まれているという。これらの文献は、秦代の諸制度や実情を窺う上で、非常に重要な資料となろう。

なお、二〇一一年十二月には、『数』書の図版と釈文とを掲載する『岳麓書院藏秦簡（貳）』が刊行された。今後の検討が待たれる。

（金城未来）

『銀雀山漢墓竹簡（貳）』（銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社、二〇一〇年一月、三二二頁（他）、出版説明・銀雀山漢墓竹簡総目・銀雀山漢墓竹簡状況簡介・凡例・目次など二〇頁）、縦組繁体字）

銀雀山漢墓竹簡（銀雀山漢簡）の図版と釈文とを収載した書。『銀雀山漢墓竹簡』は全三冊の刊行が予定されており、本書はその第二分冊にあたる。一九八五年の第一分冊刊行から、二十五年の歳月を経て出版された。モノクロ図版と釈文註釈の二部構成となっており、さらに巻末には附録として竹簡の摸本（抄出）が掲載されている。

銀雀山一号・二号漢墓は、前漢武帝初年の墓であり、出土した竹簡の字体は早期の隸書体に属し、文帝や景帝から武帝初期に筆写されたものと推測される。また、兵書を多く所有していたことから、漢墓の墓主は軍事家であつたと推定されている。

本書には「佚書叢残」として、第一分冊には採られなかった比較的まとまりのある文献や、残欠部分が多いが、篇義が比較的明確な文献が収められている。各篇の配列については未詳であるが、内容に基づき「論政論兵之類」「陰陽時令、占候之類」「其他」の三部に分けられ掲載されている。以下、三部の内容を概説する。

「論政論兵之類」は、全五十篇よりなり、おおむね兵権謀家的思想の特色が見られる。第一～十二篇は、篇題が一号墓から出土した篇題木牘に見える。十二篇以外の各篇は字体によって二組に類別される。一つは隸書で記された第十三～四十四篇、もう一つは草書の筆法を帯びた第四十五～五十篇である。論兵篇の中には、かつて多く『孫臏兵法』下編に編入された文献が含まれているが、それらはすべて、孫臏の書に属させるには根拠が不足していた。そのため、本書においては内容や篇題木牘（第三分冊に所収予定）により、それらを『孫臏兵法』から除外し、「論政論兵之類」として再編している。

「陰陽時令、占候之類」は全十二篇よりなり、兵陰陽家的思想を帯びる。銀雀山漢墓竹簡整理小組は、中でも「曹氏陰陽」「三十時」「天地八風五行客主五音之居」「占書」などの篇（第一部の「君臣問答」も同様）は、他の篇に比べて相対的に量が多く、これらを独立した書とみなすべきであろうとしている。

「其他」は全十三編に分類・整理されているが、第六篇以下の篇はただ一枚の標題簡があるだけで、篇義は不明である。整理小組の「編輯説明」によれば、本部には「論政論兵之類」や「陰陽時令、占候之類」に括ることのできなかつた竹簡を所収するという。その中には、「唐勒論御」賦、相狗方、作醬法、算書などの残篇が収められており、内容は多岐に渡っている。

なお、今後刊行される第三分冊には、「散簡」「篇題木牘」「元光元年曆譜」「附録 竹簡順序号与田野登録号对照表」の収録が予定されている。

（金城未来）

『楚地出土戦国簡冊「十四種」』（陳偉等著、經濟科学出版社、二〇〇九年八月、五五八頁、横組繁体字）

包山楚簡や郭店楚簡など、楚地で出土した計十四種の戦国簡について、それぞれ基礎情報・釈文・注釈を掲載した書。

本書の特徴は、まず第一に竹簡の精密な読解を行っていることである。早稲田大学COEの協力を得て赤外線撮影装置による竹簡の撮影を行い、これまで不鮮明であった文字を確認している。釈読・注釈は、この新たな写真に基づいて行われている。その結果、これまでになく新解釈を提示している。また、千以上の国内外の文献を参考にして、それぞれの竹簡ごとに説明、釈文、注釈を付けている。そして、所属不明となっていた竹簡残片にも注目し、それらを含めて、竹簡の分類・配列について再検討している。

楚地出土資料は、これまでさまざまな雑誌・文献によって別々に公開されてきた。本書は、それらを一冊にまとめており、きわめて利便性が高い。これが本書の第二の特徴である。

なお、上博楚簡は盗掘の結果、香港に流失し、上海博物館が買い上げた竹簡であるが、その竹簡に付着した土の成分や竹簡に書かれた楚系文字の特徴から、楚地出土資料だと考えられている。しかし、本書では対象外として掲載していない。

本書に対する詳細な書評については、湯浅邦弘・草野友子「楚地出土文献へのいざない——陳偉等著『楚地出土戦国簡冊「十四種」』（『中国研究集刊』第五十一号、二〇一〇年十月）を参照。

（梶島雅弘）

『上博館藏楚竹書《緇衣》綜合研究』（虞萬里著、武漢大学研究叢書、楚地出土戦国簡冊研究05、武漢大学出版社、二〇〇九年十二月、五八一頁、横組繁体字）

馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』第一分冊（上海古籍出版社、二〇〇一年）に収録された文献の一つである『緇衣』について、総合的に研究した書。武漢大学簡帛中心の「楚地出土戦国簡冊研究」シリーズの一冊である。

上博楚簡『緇衣』は、現在伝わっている『礼記』緇衣

篇と比べ、章の配列が異なり、また文字の異同が多く見られるが、基本的に同一の文献と考えられる。また、上博楚簡より前に発見された郭店楚簡にも、『緇衣』と見られる文献が含まれている。

本書の特徴は、上博楚簡『緇衣』、郭店楚簡『緇衣』、伝本『礼記』緇衣篇に加え、唐代の『開成石経』も参考にして『緇衣』の校勘を行っていることである。これまでに『緇衣』に関する研究は多く存在したが、本書はそれらの研究を踏まえ、より総合的に校勘を行っている。

また本書は、『緇衣』と孔子の関係、『緇衣』と『詩経』『書経』の関係、『緇衣』の作者と成立年代など、校勘以外にも広く考察を行っている。

なお本書の第一章第二節では、上博楚簡『緇衣』と郭店楚簡『緇衣』に関する先行研究を刊行年月日順にまとめており、研究の流れをつかむのに有益である。

(杵島雅弘)

『中国簡帛書籍史』（耿相新著、三聯書店、二〇一一年六月、四九八頁、横組簡体字）

中国における簡帛書籍の歴史をまとめた書。著者は本

書冒頭の「従作者到読者―代序」で、従来の簡帛書籍史に関する研究が文献学から独立できていないことや、「通史」として出版されているものが厳密には断代史であることを指摘し、中国書籍史は学問として十分に体系化されていないと主張する。このような問題意識に基づいて、本書には、簡帛書籍史研究で対象にすべきだと著者が考える十二の項目が、緒論、結語を含め全十二の章にそれぞれまとめられている。構成は以下の通り。

「緒論 書籍の起源」、「第一章 簡帛書籍の外観形制」、「第二章 簡帛書籍の書写与繕写」、「第三章 簡帛書籍の内部結構」、「第四章 簡帛書籍の著作形式」、「第五章 簡帛書籍の内容分類」、「第六章 簡帛書籍時期的作者群体」、「第七章 簡帛書籍の編校方法」、「第八章 簡帛書籍の伝播方式」、「第九章 簡帛書籍の閲読群体」、「第十章 国家对簡帛書籍的管理」、「結語 簡帛書籍の文化影響力」。

このうち、作者群体、閲読群体、内部結構、著作形式、文化影響力については、「従作者到読者―代序」において著者自身が、従来の中国書籍史研究においては関心が低かった点だと述べている。このように、従来の研究では注意が払われていなかった点も、本書では考察されており、新しい研究の視点が提示されているといえる。

先に挙げた十二項目の前には、図版、目録、従作者到読者―代序を収める。図版は、甲骨卜辞、「帛書周易」、「老子乙本」など十九点が収められ、そのうち十五点はカラー印刷となっている。また、本書末尾には、参考文献、索引、後記、図版目録が附されている。

著者は、簡帛書籍史を研究する際の手法として、出土文物および同時代の伝世文献を用いた「互証（相互の検証）」を重視している。この手法により、中国最初の書籍形態である簡帛書籍の復原を試みている点に本書の特徴があるといえる。

（中 蘭 潤）

『新出楚簡研読』（陳偉著、武漢大學研究叢書、楚地出土戰國簡冊研究01、武漢大學出版社、二〇一〇年三月、三五二頁、横組繁体字）

著者による楚簡研究の成果を収載した書。前掲の『上海博物館藏楚竹書《緇衣》綜合研究』と同じく「楚地出土戰國簡冊研究」シリーズの一冊で、全六章。対象簡の紹介も兼ねて章題を紹介すると、以下の通り。第一章「包山簡冊新探」、第二章「望山・九店簡研読」、第三章「葛陵

楚簡研読」、第四章「上博竹書研読（一）」、第五章「上博竹書研読（二）」、第六章「上博竹書研読（三）」。

巻末には附録として、「簡帛解読的知識背景」、「1952—1980年間的楚簡研究」、「鄂君啓節」―延綿30年の研読、「相關論文發表情形」の四項が附されている。

第一章の包山楚簡に対する考察は、簡中の字、語句についてのもが主である。終節では同簡と江陵磚瓦廠370号戰國楚墓から出土した殘簡との共通点を指摘し、考察に及んでいる。第二章では望山楚簡の「卜筮禱祠記録」と包山楚簡との比較・考察、九店楚簡の日書と睡虎地秦簡の日書との比較・考察がなされている。第三章は葛陵楚簡（新蔡楚簡）の原釈文を検証した上での、同簡の卜筮や禱祠などについての考察である。

以上が本書の前半部であるが、以降、後半部すべては上博楚簡についての論文・札記である。第四章は郭店楚簡「性自命出」と当該楚簡「性情」の対読のほか、『上海博物館藏戰國楚竹書』の第二分冊から第三分冊に収録された各種文献の検討が行われている。第五章は第四分冊と第五分冊、第六章は第六分冊と第七分冊所収の文献についての検討である。第五分冊以降の文献についてはすべて触れているが、第二分冊から第四分冊までのうち、『民之父母』、『恒先』、『彭祖』、『采風曲目』、『逸詩』、

『内礼』、『相邦之道』、『曹沫之陳』については触れられない。

(佐藤由隆)

『從出土簡帛看思孟學派的內聖外王思想』(謝耀亭著、科学出版社、二〇一一年八月、一九三頁、横組簡体字)

郭店楚簡、上博楚簡と、馬王堆帛書および伝世儒家文献とを総合的に考察した、思孟学派の内聖外王思想の研究書。全七章。著者の博士論文を加筆・修正したものである。「教育部哲学社会科学重大課題攻关項目「中国早期文字与文化研究」成果之一」(王暉主編)として出版された。歴史学、文化学、言語文字学研究に関連する書である。本書の構成は次の通りである。

まず第一章「緒論」で研究テーマの意義や研究状況、基本スタンスや研究方法を明らかにし、第二章「思孟学派、内聖外王及其相關問題論析」で思孟学派の定義と誕生の歴史的背景、その変遷を述べ、道家で用いられた「内聖外王」という語が儒家に転用された様相や、『礼記』大学篇に見受けられる具体的な内聖外王思想について

の説明がなされる。

そして次の段階として、内聖と外王それぞれについての考察が行われる。第三章「從出土簡帛看思孟學派的內聖思想」でまず内聖思想に焦点を当てる。馬王堆帛書や郭店楚簡『五行』と伝世文献のそれを比較しながら、原始五行と思孟五行の關係性、および修養論の考察を行い、次に郭店楚簡『性自命出』でその心性論を、『窮達以時』でその天人關係論を検証している。第四章「從出土楚簡看思孟學派的外王思想」は、題名の通り外王思想について三点の考察を行っている。一つは、郭店楚簡『唐虞之道』を用いた思孟学派的禪讓觀の特徴の考察。二つは、上博楚簡『徙政』と郭店楚簡『尊德義』、および同『緇衣』の思想を検証した上での、孟子の王道仁政思想、すなわち政治思想の考察。三つは、郭店楚簡『魯穆公問子思』を用いた、思孟学派的徳と位との關係に対する考え方、すなわち「以德抗位思想」の考察である。

第五章「思孟學派內聖外王的貫通」では、郭店楚簡『成之聞之』および同『六徳』の思想を用いた考察がなされる。第六章「思孟學派對後世的影響及其現實價值」は、思孟学派が宋代以降の思想に及ぼした多大な影響を示し、民族の伝統や文化、その精神の形成に大きく貢献をしたとして、当該研究の価値を述べたものである。第

七章「結語」は総括の部である。

全体の概観から分かるように、郭店楚簡の各種文献について、思孟学派の思想研究という観点から分析したものが多く見受けられる書である。

(佐藤由隆)

『出土文献』第一輯・第二輯（清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤編、第一輯、二〇一〇年八月、二八四頁、第二輯、二〇一一年十一月、三〇〇頁、横組繁体字）

清華大学出土文献研究与保護中心が主宰する専門の學術集刊。

第一輯、第二輯に共通して、目録では扱う資料の時代ごとに論文が分類されている。清華大学の編集ということで、清華簡に関する論文が最も多い。また、巻末に「紅樓追憶」として論文著者による回想録が附されている。これには、一九七六年の唐山大地震の際の資料整理についても語られており、資料整理の「表」が研究結果である論文だとすれば、「紅樓追憶」はその「裏」側を述べた手記であるといえる。

第一輯には、三十一篇の論文が収録されている。目録はおおよそ四つに区切られており、一つ目は清華簡（『著夜』『金縢』『保訓』）に関する論文十一篇、二つ目は甲骨や青銅器の文字に関する研究および郭店楚簡『老子』など秦代までの出土資料に関する論文十六篇で、時系列順に収録されている。三つ目は里耶秦簡に関する論文二篇、四つ目は鮑水竹簡の脱水和保護に関する論文二篇となっている。また、本書に掲載されている論文のうち一篇は、日本人研究者（大西克也）によるものである。

第二輯には、二十九篇の論文が収録されている。目録は第一輯よりも細かく分類されており、清華簡（『伊至』『著夜』『逸周書』『皇門』『祭公』『楚居』）に関する論文が十一篇、古代から現代に至るまで広い範囲にわたって考察された漢字に関する論文が二篇、甲骨や金文の文字など、戦国以前の出土資料に関する論文が五篇、戦国時代の出土文献（上博楚簡『鄭子家喪』など）に関する論文が五篇、居延漢簡など、漢代の出土資料に関する論文が三篇。最後に、二〇〇九年に発掘された明代墓誌の釈読に関する論文、清華大学による漆器の保護に関する論文が一篇ずつ収録されている。また、本書に掲載されている論文のうち一篇は、日本人研究者（小寺敦）によるものである。

本書の特徴として、これまで出土資料研究においてあ

研究書（和書）

まり取り上げられなかった、出土資料の保護に関する論文が収録されていることが挙げられる。出土資料の補正や保存に関して、科学的な分野からの分析・解説が述べられており、非常に興味深い内容であるといえる。

年一度の刊行予定であり、今後出土資料研究の最先端を知る上で有益な書となるであろう。

（大山千尋）

『郭店楚簡老子の新研究』（池田知久著、汲古書院、二〇一一年八月、五三九頁、縦組和文）

郭店楚簡『老子』に関する研究書。本書の第一編・第五編・第六編・第七編には、郭店楚簡『老子』に関する論文が、第二編・第三編・第四編には、同じく『老子』甲本・乙本・丙本全文の釈文・訳注が掲載されている。

郭店楚簡が出土した郭店一号墓の造営時期は、多くの副葬品の考古学的編年から、戦国中期（紀元前三〇〇年頃）とするのが一般的な見解である。またそれに伴い、郭店楚簡の『老子』甲本・乙本・丙本は、すでに成書さ

れた『老子』の抄本であり、『老子』の成立年代が戦国中期もしくはそれ以前に遡るという見方が多勢を占めている。しかし本書では、郭店楚墓の下葬年代が戦国中期ではなく戦国末期であり、また郭店本『老子』が、すでに完成している『老子』の一部ではなく、形成途中である『老子』の、最も早い時期のテキストであるという説を唱えている。そして、各編でもこの説を補強する論を展開している。

本書は、同著者による『郭店楚簡老子研究』（東京大学中国思想文化研究室、一九九九年十一月）を基礎としてその内容を改め、さらに第五編・第六編・第七編を追加したものである。日本において郭店楚簡『老子』に関する专著は、現時点では本書とこの書を含め、計二冊しかない。

なお、本書の最後には附編として、郭店楚簡『老子』について論じた論文集・著書が刊行年月日順にまとめられており、先行研究を調べるのに有益である。

（梶島雅弘）

『概説 中国思想史』（湯淺邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇一〇年十月、三八五頁、縦組和文）

中国思想史について概説した書。全二十章。第Ⅰ部では、春秋戦国時代から近現代まで中国思想を時代別に概説し、漢代や宋代など思想上、特に重要な時代に多く頁を費やしているのはもちろん、魏晋南北朝期や元代など、軽視されがちな時代にも各一章を設けている。

第Ⅱ部では「氣」「道」「孝」「礼」など、中国思想を語る上で欠かせない重要なテーマを取り上げている。また、「文字学」「新出土文献学」「目錄学」「史学思想」「軍事思想」「民間信仰」「日本漢学」など、幅広いテーマについて各一章を設け、その所々に新出土文献の研究の成果が盛り込まれている。

特に「文字学」「新出土文献学」は、近年多くの出土資料が発見されている状況に対応し、まとめられている。福田哲之氏担当の「文字学」の章では、戦国秦漢期の多くの出土簡帛資料を用い、文字の書体の変化・相違を説明している。また、古文釈読入門という節を設けて、具体例を挙げながら古文釈読の行い方を紹介している。草野友子氏担当の「新出土文献学」の章では、出土資料の中でも、銀雀山漢簡、馬王堆帛書、睡虎地秦簡、

郭店楚簡、上博楚簡など、中国思想史研究に重大な影響を与えたものを取り上げ、発見された順に概要を紹介している。中国思想史を概説した書は多く存在するが、出土資料を一章分使って専論しているものはこの『概説中国思想史』だけである。本書はこのように、二部構成となっており、中国思想史をタテとヨコから多角的に概説している点や、また新出土文献に関して力を入れて概説している点に特徴がある。

なお、各章の末尾にはそれぞれ、参考文献を【一般的・入門的文献】と【専門的文献】に分けて、その内容を簡潔に紹介している。それぞれの時代・分野の入門書や先行研究を知りたいときに有益である。

（枕島雅弘）

『東アジア古代出土文字資料の研究』（工藤元男・李成市編、アジア研究機構叢書人文学篇第一巻、雄山閣、二〇〇九年三月、三六二頁、縦組和文）

二〇〇五年、早稲田大学では、学内外のアジア関連の研究者を結集し、アジア研究機構を設立した。同機構の活動の一部として、長江流域文化研究所と朝鮮文化研究

所が、武漢大学簡帛研究センターなどの海外の機関と連携しつつ、出土文字資料を主たる資料として国際共同研究を進めた。本書はその研究成果をまとめた論文集である。

本書は「中国古代史篇」と「朝鮮古代史篇」から成る。以下、中国出土資料と関係する「中国古代史篇」について紹介する。収録されている論文は以下の通りである。

柿沼陽平「殷周時代における宝貝文化とその「記憶」、岡本真則「関中地区における西周王朝の服属氏族について」、楯身智志「前漢における「帝賜」の構造と変遷——二十等爵制の機能をめぐって——」、水間大輔「秦・漢の亭卒について」、森和「離日と反支日よりみる「日書」の継承関係」、凡国棟（本間寛之訳）「日書「死失凶」の総合的考察——漢代日書の楚秦日書からの継承と改変の視点から——」、谷口建速「長沙走馬樓吳簡にみえる穀物財政システム」。

これらのうち、ここでは法制資料を扱った論文と、「日書」を扱った論文について、それぞれ紹介することとする。

まず、法制資料を扱った論文には、以下の二篇があり、いずれも張家山漢簡や睡虎地秦簡などに含まれる法制資料を扱っている。

楯身氏の論文は張家山漢簡「二年律令」、睡虎地秦簡

「秦律十八種」などの出土資料から、前漢時代の「帝賜（皇帝が吏民に賜与物を下すこと）」がどのような機能をもっていたかについて検討したものである。前漢の賜与事例など賜与に関する事項が表にまとめられている。

水間氏の論文は睡虎地秦簡「封診式」、張家山漢簡「二年律令」、同「奏讞書」などの出土資料を用いて、亭（一定の距離ごとに設置され、文書伝達、宿泊施設、治安維持の機能を担った機関）の治安維持機能について明らかにすべく、亭に置かれていたとされる「亭卒」について検討したものである。

次に、「日書」を扱った二篇の論文について紹介する。いずれも、睡虎地秦簡「日書」と孔家坡漢簡「日書」を扱って、秦から漢にかけて「日書」がいかに継承されたかを論じた点に特徴がある。

森氏の論文は、睡虎地秦簡「日書」と孔家坡漢簡「日書」の両方に収録されている離日および反支日に関する占卜を検討して、秦から前漢へと至る「日書」の継承関係を考察したものである。なお、同論文の注には、現在までに出土が確認されている十数件の「日書」について、出土墓葬の年代や関連論著がまとめられており、「日書」研究の際に参考となる。

凡氏の論文は、睡虎地秦簡「日書」のうち、李零氏や

劉樂賢氏によって「視羅図」と命名された図、および、孔家坡漢簡「日書」の中の「死失図」について、図表の形式や帛日システムを考察し、両者は一致することを明らかにしたものである。更に、両者の比較を通じて秦漢交代期における「日書」の伝承と発展についても言及している。

本書には、法制資料や「日書」に関する論文以外に、西周金文や走馬樓呉簡などに関する論文も収められている。出土資料を用いた最先端の研究成果が確認できるところに、本書の意義があるといえるだろう。

(中蘭 潤)

『東アジア出土資料と情報伝達』（藤田勝久・松原弘宣編、汲古書院、二〇一一年五月、三八四頁、縦組和文）

本書は、二〇〇八年に刊行された『古代東アジアの情報伝達』（汲古書院）の続編で、愛媛大学「資料学」研究会の活動から始まった共同研究の成果をまとめたものである。本書「はしがき」によれば、今回の共同研究では、特に以下の二点に重点が置かれたとされる。第一

に、文書などの情報処理と、中国簡牘と日本古代木簡の接点となる記録、付札、字書・習書などの機能を明らかにすること。第二に、交通システムと人々の往来による情報伝達の実態を比較すること。以上の点を踏まえて、東アジアを専門とする研究者達が共同研究を進めた成果が、本書にまとめられている。

本書は、第一部が「古代中国の情報伝達」、第二部が「古代日本、韓国の情報伝達」という二部構成となっている。中国出土資料と関係がある第一部に収められた論文を以下に紹介する。

藤田勝久「中国古代の文書伝達と情報処理」、胡平生（佐々木正治訳）「里耶秦簡からみる秦朝行政文書の製作と伝達」、角谷常子「漢・魏晉時代の詔と刺」、安部総一郎「走馬樓呉簡中所見「戸品出錢」簡の基礎的考察」、邢義田（廣瀬薫雄訳）「漢代の『蒼頡篇』、『急就篇』、八体と「史書」の問題——秦漢時代の官吏はいかにして文字を学んだか——」、王子今（菅野恵美訳）「中国古代交通システムの特徴——秦漢文物資料を中心に——」、金秉駿（小宮秀陵訳）「中国古代南方地域の水運」。

これらのうち、邢氏による論文は、張家山漢簡『二年律令』中の「史律」、里耶出土の習字簡、長沙市東牌樓出土の習字簡、『英国国家図書館蔵斯坦因所獲未刊漢文

簡牘』(二〇〇八年、上海辞書出版社)に収められた『蒼詰篇』の習字の削衣(こげ)などの新出土資料を使つて、秦漢時代の官吏がいかに文字を学んだかについて考察したものであり、文字に関する研究として注目される。

その他の論文においても、走馬楼三国呉簡、居延漢簡、懸泉漢簡などの出土資料が使われている。出土資料を積極的に活用し、中国古代の情報伝達システムの実態を解明しようとした点に、本書の意義があるといえる。

(中 蘭 潤)

『中国古代国家と社会システム——長江流域出土資料の研究——』(藤田勝久著、汲古書院、二〇〇九年九月、五五八頁、縦組和文)

長江流域出土資料を主対象とした研究書。戦国、秦漢時代の国家と地域社会を考察したもので、十二章に序章と終章を加えた全十四章。第三章を除き、みな各誌に発表したものを全文掲載、あるいは増補、改稿したものである。初出は巻末に詳しい。各章題は次の通り。

序章「中国出土資料と古代社会」、第一章「中国古代の秦と巴蜀、楚」、第二章「包山楚簡と楚国の情報伝達」、

第三章「戦国秦の南郡統治と地方社会」、第四章「里耶秦簡と秦代郡県の社会」、第五章「里耶秦簡の文書形態と情報処理」、第六章「里耶秦簡の文書と情報システム」、第七章「里耶秦簡の記録と実務資料」、第八章「長江流域社会と張家山漢簡」、第九章「張家山漢簡「律関令」と詔書の伝達」、第十章「張家山漢簡「律関令」と漢墓漢牘」、第十一章「秦簡時代の交通と情報伝達」、第十二章「中国古代の書信と情報伝達」、終章「中国古代の社会と情報伝達」。

本書の概略は次の通りである。序章は出土資料の概略と研究史をふりかえり、同書の基本的な方法を提示したものである。第一章は当該長江流域出土資料の分析が、戦国時代から秦漢王朝の地域社会モデルになることを示した概論。第二章と第三章は、楚と秦の社会システムの違いを明らかにするもの。特に第三章は、法制史の中心であった睡虎地秦簡を、地方社会のなかで再検討したものの。

第四章から第七章までは、これまでに公表された里耶秦簡を分析して、秦代郡県制の構造と、地方官府の情報処理、実務資料による運営、社会システムとの関係を考察したもの。第八章から第十章までは、漢代の南郡の中で張家山漢簡を位置づけたもの。歴譜や法令が中央の情

報を保存する性格を持ち、遺策や書籍は地域性を反映するという想定のもと、考察がなされている。第十一章と第十二章は、交通や人々の移動に関わる問題として、里耶秦簡などの地名里程簡や、戦国・秦漢時代の書信と名謁（人に会う際に差し出す木牘）を考察したもの。そして終章は、長江流域の出土資料を中心に、漢簡を含めた資料学を展望し、中国古代国家と社会システムの特色を整理したものである。ここでは特に、中国古代社会の体系と文字資料を原型として、東アジアの木簡研究との接点の提示が試みられている。

本書が特に課題としているのは、中国古代文明における漢字文化の実態と古代の社会システムにかかわる事柄であるが、終章からも分かるように、筆者の大いに意図したところの一つは、将来に総合的な出土資料学を構築すべく、他分野の者にも分かるような概略を提示することであり、その点で端緒となりうる書である。

なお、巻末には里耶秦簡の釈文が附編として収録されている。

（佐藤由隆）

『出土資料と漢字文化圏』（谷中信一編、汲古書院、二〇一一年三月、三九六頁、縦組和文、横組繁体字）

谷中信一氏を代表とする「出土資料と漢字文化研究会」と国内外の研究者およびシンポジウムの研究成果をまとめた書。『楚地出土資料と中国古代文化』（郭店楚簡研究会編、汲古書院、二〇〇二年三月）（提要（二）で解説済）の刊行以降九年間の出土資料の研究を主に対象としている。

本書には、上博楚簡『平王問鄭壽』『鄭子家喪』『君子為礼』『凡物流形』『天水放馬灘秦簡』『日書』『志怪故事』『郭店楚簡』『語叢四』『老子』の「名」に関する十七篇の論文が収められている。うち十一篇は日本人研究者のもので、六篇が国外の研究者による論文である。研究者はそれぞれ異なった専門分野を研究している一方で、全員が出土資料を扱うという共通点を持っている。例えば、『凡物流形』（二〇〇八年十二月出版の『上海博物館戰國楚竹簡』第七分冊に所収）に関しては四篇の論文が収録されている。李承律氏は「思想編年」の問題について『凡物流形』を例として取り上げているのに対し、福田哲之氏は『凡物流形』の甲本乙本を比較研究すること、系譜関係を検討し、乙本と甲本は系譜上直系の親子

関係にあり、甲本は乙本を底本として書写されたものであることを明らかにしている。また、谷中氏は「一」の概念について『凡物流形』における「執一」の思想から読み解き、王中江氏は「一」と「多」の対立をもとに『凡物流形』を黄老学の視点から考察している。このように、多角的な視点から、出土資料の研究成果をうかがえる点に、本書の特徴がある。

本論集には、漢字文化圏で発見された出土資料についての論文が収録されているが、その資料は中国大陸での新出楚簡に関する論文が大部分を占めており、日本の出土資料を用いた研究論文はわずか一篇に過ぎない。東アジア全域にまたがる「漢字文化圏」を標榜するならば、より広い視野からの研究が期待される。

なお口絵として、上海博物館藏戰国楚竹書、湖南大学岳麓書院藏秦簡、長沙市簡牘博物館原寸大復元展示、精華大学藏戰国簡、北京大学藏漢簡、上博楚簡（七）『凡物流形』甲本第一号簡・乙本同、郭店楚墓出土地点・荊門博物館藏郭店楚簡、奈良文化財研究所藏木簡のカラー写真が収録されている。

（大山千尋）